

飛鳥時代の須恵器を見て考える

香川県埋蔵文化財センター 考古学講座 65

令和5年8月19日 稲垣 僚

1. はじめに

須恵器は複数の遺跡から数多く出土する上に、窯跡で作られたものであることから生産地が明らかな遺物である。そのため、年代を求める際の基準として有効であり、当時の交流を考察するのにも役立つ。そして、何よりも須恵器は堅牢で扱いやすい。

飛鳥時代に須恵器は大きな転換期を迎える。さらに、古墳時代の須恵器研究で年代の基準となっていた大阪府の陶邑窯出土須恵器に加えて、当時の都があった飛鳥地域で出土した須恵器も年代の基準として扱われるようになり複雑性がました。ところが、そんな飛鳥時代の須恵器研究が近年になって再び注目されるようになり、研究の見直しを全国的に求めるまで発展してきている。

そこで、今回の講座では県内の遺跡から出土した須恵器を題材にその見方を説明した上で、変遷を確認する。また、今後の課題となっている地域色についても紹介する。

2. 対象遺跡の提示【図2】

対象とする遺跡はいずれも香川県埋蔵文化財センターが発掘調査を行ったもので、内訳は集落跡5・古墳1・窯跡3となる。ただし、丸亀市教育委員会が調査を行った青ノ山1号窯、昭和12年に調査が行われた香南大坪窯の資料を変遷表作成時に引用している。

①兀塚遺跡(高松市檀紙町・円座町)

推定南海道の北に位置する古代前半と中世前半を中心とした集落遺跡。SR602 は自然河川で下層から弥生中期・弥生後期後半～古墳前期の遺物が、中層～上層からは6世紀末～7世紀初頭頃・古代前半頃の遺物が出土した。(香川県埋蔵文化財センター2014)

②旧練兵場遺跡(善通寺市仙遊町)

縄文時代後期から中世にいたる複合遺跡で、特に弥生時代中期後半～古墳時代前期には大規模集落を形成する。7-8区 SX02 は水溜のために掘られたと考えられる土坑で、埋土上位に地山ブロックを多数含むため、人為的に埋められた可能性が高い。遺物は7世紀中葉頃のものを中心に、破片が散乱した状態で出土したため廃棄されたものの可能性が高い。(香川県埋蔵文化財センター2015)

③下川津遺跡(坂出市川津町)

瀬戸中央自動車道が国道11号と交わる坂出インターチェンジ建設に伴って発掘調査が行

われた遺跡で、弥生時代前期から室町時代にかけて営まれた大規模な集落跡が見つかった。SDⅢ86は弥生時代後期～古墳時代前期の幹線的な溝であったSDⅡ20を再利用する形で6世紀後半頃にかけて掘削された溝跡。埋土は3層に分割でき下層はSDⅡ20、中・下層はSDⅢ86に相当する。(財団法人香川県埋蔵文化財調査センター1990)

④川津一ノ又遺跡(坂出市川津町一ノ又)

丸亀平野における集落変遷を明瞭に示す、弥生時代から中世にかけての遺跡。SD15は埋土が上・中・下の3層に分けられるものの、土層や掘削状況から短期間に埋められたと考えられる。そのため、出土した7世紀前半の土器群は一括性の高い資料といえる。一方、SD10についても埋土が3層に大別でき、下～中層出土遺物は埋土の堆積状況から一括資料と考えられ、上層出土遺物についても年代の異なる遺物が若干見られるものの、個数が少ないことから概ね同時期と考えられる。時期は畿内産土師器と酷似する土師器群を主な手がかりとして7世紀第2四半期と推定される。なお、SD10とSD15は堆積状況から同一の溝と推定されている。(香川県埋蔵文化財センター1997・1998、片桐孝浩2001)

⑤稲木遺跡(善通寺市下吉田町)

弥生時代後期の集落跡と墓地、7世紀頃の集落跡が見つかった遺跡。B区SD07は7世紀末～8世紀初頭の土器が出土した溝。(香川県教育委員会1989)

⑥北原2号墳(善通寺市善通寺町)

2号墳は大小2基の横穴式石室を主体部にもつ円墳である。第1主体部から出土した須恵器はTK43～209型式の新しい段階までの時期差があり、6回の追葬が推測されている。一方、第2主体部は石室の規模や遺物の出土状況から埋葬は1回だったと考えられ、時期はTK43併行期と見られる。(香川県埋蔵文化財センター2003)

⑦打越窯跡(坂出市府中町打越)

1968年に発見された窯跡で、四国最大の窯跡群である十瓶山窯跡群の中でも最古に属する。1982年に実施された発掘調査では残存状態が良好な灰原を検出したため大量の須恵器が出土したものの、窯体は発見されなかった。出土須恵器はコンテナ約220箱分あるが、時期差があるとされている。なお、時期は7世紀半ばから後半と推測されている。(渡部明夫・森格也・古野徳久1997、佐藤竜馬1993)

⑧志度末3号窯(さぬき市末)

窯体や近接する廃棄土坑から少量ながら遺物が出土している一方、灰原は後世の土地改変で失われた。単独操業の窯であり、窯体自体にも目立った補修痕も確認できないため短期間の操業であったと推測できる。時期は蓋杯の形態から杯Gが出現し杯Bが出現するまで

の頃とみられる。(香川県埋蔵文化財センター2000)

⑨小谷窯跡(三木町井上)

3基の須恵器窯と灰原が確認されており、1・2号窯については出土遺物から7世紀末～8世紀初頭に併存したと推定されている。出土遺物が皆無であった3号窯についても2号窯との位置関係などから同時期と考えられている。1号窯は1～3次の計3枚の床面が想定されているが、調査段階で確実に検出できたのは1次・3次床面であったので、本来は2次床面に帰属する遺物が3次床面のものに含まれる。(香川県埋蔵文化財センター2002)

3. 器種の分類と基準となる須恵器編年【図3・4】

須恵器には蓋杯や高杯・皿といった供膳具、壺や甕といった貯蔵具、煮炊きを使う甑といったように様々な種類がある(=器種)。そんな器種の中でも、杯類は出土量が格段に多く、形態の変化も著しいため年代の基準として一般的に使用される。ちなみに、甕や壺などの貯蔵具は変化が乏しく、製作技法を明瞭に反映させるため工人系譜の検討や、流通を考える上で有用となる。

次に、須恵器の変遷を考える上で基準とする須恵器編年とその内容についても紹介する。陶邑編年は日本随一の須恵器生産地である陶邑窯跡群(大阪府南部)から出土した須恵器を基に作成された年代の基準で、灰原を含む各窯跡単位で作成した田辺昭三氏の編年案(田辺1966・81)と同時焼成が明らかな窯床単位で作成した中村浩氏の編年案(中村1978)が並立している。一方、飛鳥編年は飛鳥地域から出土した土器を基に西弘海が作成した(西1982)もので、現在も主に奈良文化財研究所が改変を行っている(奈良文化財研究所・歴史土器研究会2019)。

4. 須恵器の変遷【図5】

陶邑編年と飛鳥編年を対比させた上で、県内の出土事例を位置付けたのが図5である。1期～4期までは杯H蓋・身の変化に注目すると、口径や受け部径が小さくなっている点と身の立ち上がり部分が低く、内側に丸まっていくことがわかる。一方、5期～7期では杯B蓋の移り変わりに着目すると5期(かえりあり)→6期(かえりあり+なし)→7期(かえりなし)と変化することがわかる。また、調整についても杯H蓋・身は1期から4期に移り変わる過程で徐々にヘラケズリ調整を行わなくなる。ちなみに、この変化は杯G身にも確認できる。さらに、かえりをもつ蓋は杯Gと杯Bの双方に存在するが杯Gのものは小型でかえりが突出するのに対して、杯Bのものはやや大型でかえりが内側に引っ込む傾向がある。しかし、器種によっては判断が難しいものがあり、近年になって杯G身→杯A身への変化が不明瞭であることから、無台杯とする研究者も出てきている。

このように、須恵器の変遷を把握しておけば発掘調査の現場で遺物が出土した際に、その遺物を鍵として年代を求めることができる。

5. 地域色【図6・7】

ここまで、須恵器の変遷を確認してきたが、実は須恵器の編年研究には大きな課題がある。それは、日本全国の須恵器が同時に変化する前提ありきでの研究という点である。一方、縄文土器や弥生土器の研究では交差年代決定法という手法(他地域の土器が共伴している事例を組み合わせて、年代観を決める)が用いられる。しかし、須恵器はとてもシンプルなため手掛かりに乏しく、陶邑窯が先導して須恵器生産を行ったという想定から、この方法を積極的に用いていない。では、今よりも情報伝達網が発達していない当時に、全国ほぼ一律な須恵器生産は行えたのか。

図6—①は三重県多気町に所在する河田古墳群のC-12号墳から出土した須恵器である。65だけ明らかに立ち上がりが高く、底部はヘラケズリ調整を行っているため古手に見える。しかし、図6—②のように隣国の尾張では同時期にこのような須恵器を生産している上に、図6—③のように飛鳥地域の甘樫丘東麓遺跡SX037では類品同士が共伴している。ちなみに、この古墳は主体部が木棺直葬であるため、一括性は高いといえる。つまり、地域色を認識しておかなければ時期差と誤認してしまう場合もある。

さらに近年、飛鳥地域において尾張産須恵器だけでなく備前や播磨の窯跡出土品と酷似する須恵器が見つかり始めている。では、讃岐産須恵器はないのか。実はおおいにありえる話で、平安時代に編纂された『延喜式』という法典に都に須恵器を納めた国が上げられているが、播磨・備前だけでなく讃岐も含まれている。つまり、地域色を考慮することで地域間のズレを認識できるだけでなく、都城で自国産の須恵器を見つけられれば、直接年代の根拠をえることができる。また、播磨・備前・讃岐の須恵器の区別が上手くいかなかったとしても、地域色が微細ならば瀬戸内海東部の地域色としてまとめて考えることで、飛鳥地域における出土例の増加に繋がり、年代決定の可能性も広げることができるかもしれない。

6. おわりに

今回の考古学講座は「飛鳥時代の須恵器を見て考える」と題して、須恵器の見方や種類を説明した上で、県内における須恵器の変遷を確認した。今回、紹介したのは香川県内で出土した須恵器のほんの一部であるため、みなさまの近所にある遺跡や博物館で展示されているような有名な遺跡を省いているかもしれない。なので、是非身近の郷土史を調べる際、博物館や発掘調査の現地説明会に足を運ばれる際には本日の事を踏まえて、より楽しんでいただければ幸いです。

表1：飛鳥時代の年表

年号	出来事
538年	百濟から仏教が伝わる
588年	法興寺(飛鳥寺)の造営が始まる
592年	蘇我馬子が崇峻天皇を殺害 推古天皇が飛鳥豊浦宮で即位
593年	厩戸王(聖徳太子)が推古天皇の摂政となる
603年	飛鳥小墾田宮に遷都 厩戸王によって冠位十二階が制定される
604年	厩戸王によって憲法十七条が制定される
605年	厩戸王が斑鳩に移住
607年	小野妹子を隋に派遣
622年	厩戸王が亡くなる
629年	欽明天皇が即位
630年	第一回の遣唐使を派遣 欽明天皇が飛鳥岡本宮に遷都
638年	山背大兄王が斑鳩に法隆寺を建立
641年	蘇我倉山田石川麻呂が山田寺建立を始める
642年	皇極天皇が即位、小墾田宮へ遷る
643年	蘇我入鹿が山背大兄王とその一族を滅ぼす
645年	乙巳の変(中大兄皇子が中臣鎌足らとともに蘇我蝦夷・入鹿を討つ) 孝徳天皇が即位
646年	大化改新の詔が発布される 大化の薄葬令を発布
651年	孝徳天皇が難波長柄豊崎宮に遷る
653年	中大兄皇子が孝徳天皇を残して飛鳥河辺行宮に移る
655年	齊明天皇が即位し、都が再び飛鳥へ戻る
660年	中大兄皇子が漏刻(水落遺跡)を造る
663年	白村江の戦い
667年	近江大津宮に遷都
668年	天智天皇(中大兄皇子)が即位
670年	庚午年籍(はじめての戸籍)をつくる
672年	壬申の乱(大海人皇子×大友皇子)
673年	天武天皇(大海人皇子)が飛鳥浄御原宮で即位
681年	律令と国史の編纂をはじめ
690年	持統天皇が即位
694年	持統天皇が藤原京に遷都
697年	文武天皇が即位
701年	大宝律令を制定
707年	元明天皇が即位
708年	和同開珎を発行
710年	平城京に遷都

表2：須恵器と土師器の違い

須恵器	土師器
	
灰色で硬質	茶褐色で軟質
5世紀以降に渡来人が持ち込んだ外来技術	弥生土器の流れをくむ日本の伝統的な技術
1千度以上の高温で窯焼き	六百度程度の低温で野焼き
還元焰焼成	酸化焰焼成
轆轤引き成型	手づくね成型
胎土中に孔が存在しない =水分が蒸発しにくく、膨張した空気は抜けない	胎土中に孔が存在する =水分が蒸発しやすく、膨張した空気が抜ける

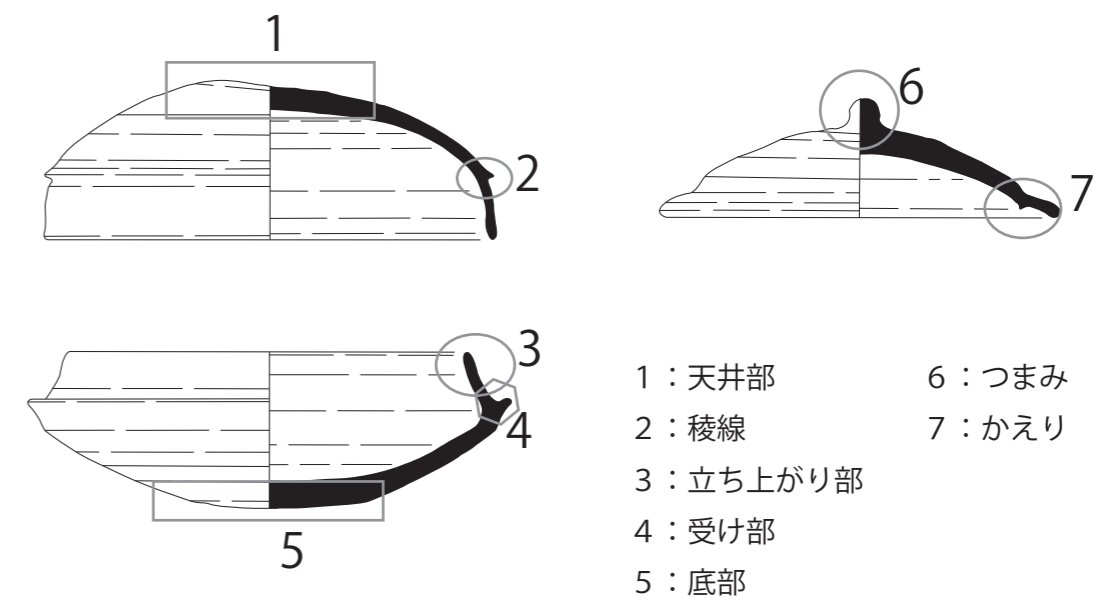


図1：須恵器杯類の部分名称



* 図中番号は本文の遺跡番号と同じ

図2：対象遺跡の位置

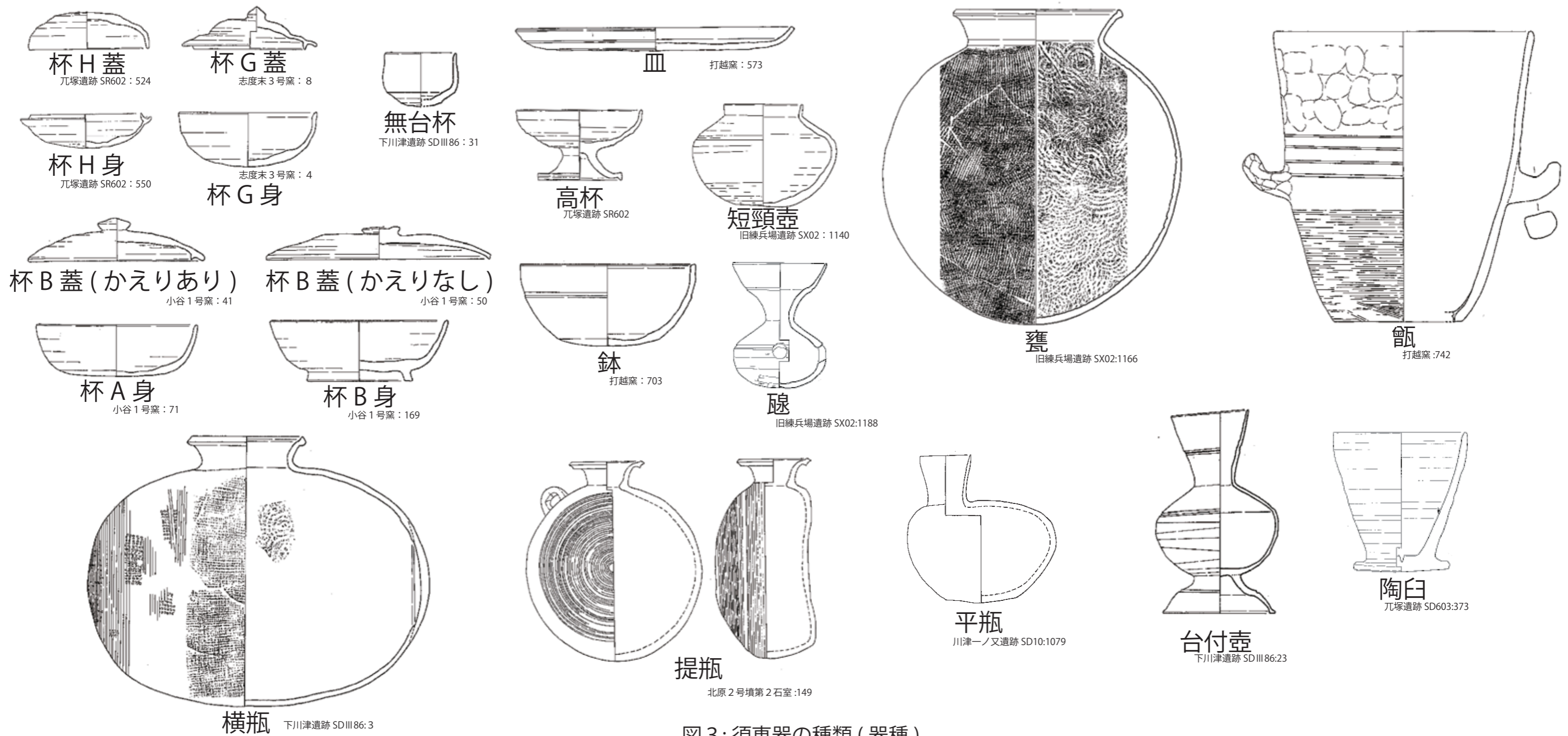


図3: 須恵器の種類 (器種)



ヘラケズリ



ヘラ切り



回転ナデ

図4: 須恵器の調整

和泉陶邑編年

飛鳥編年

香川県内の遺跡

〈生産地〉

〈消費地〉

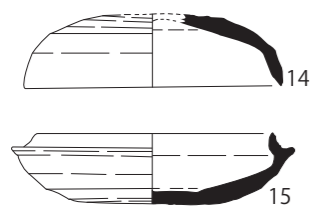
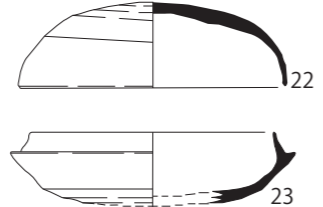
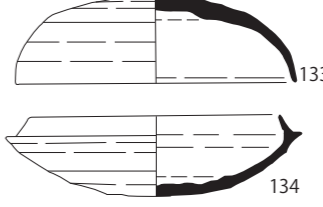
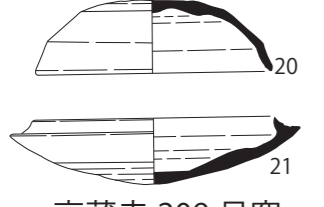
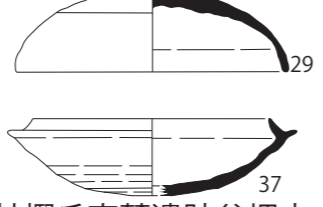
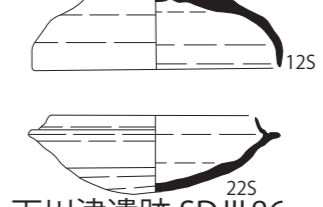
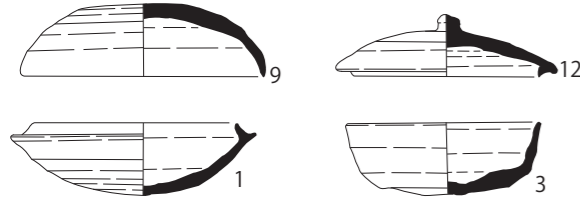

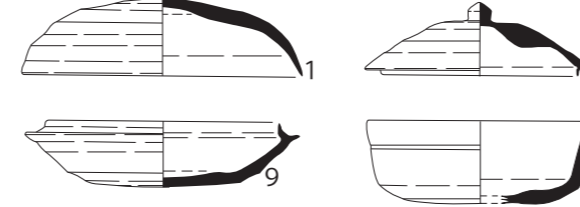
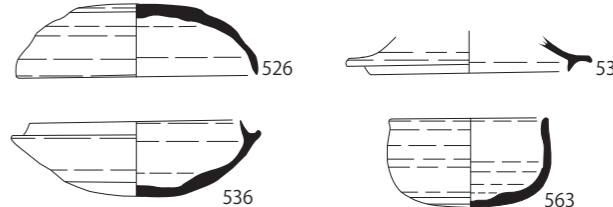

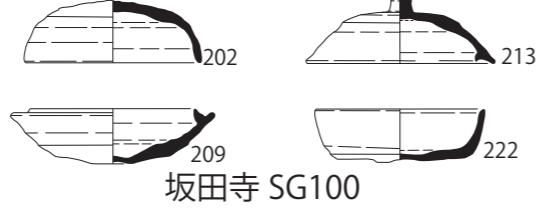
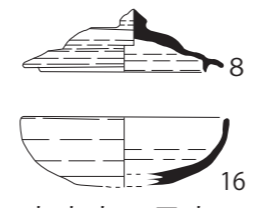
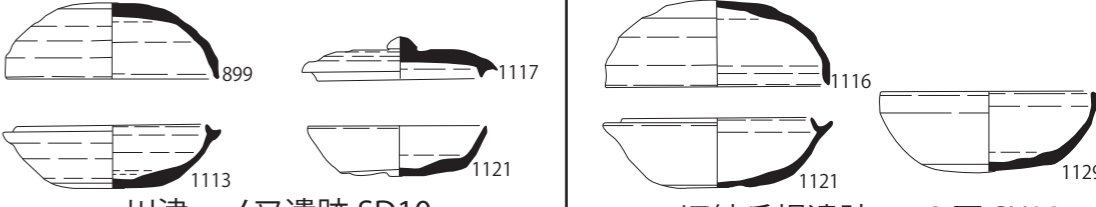
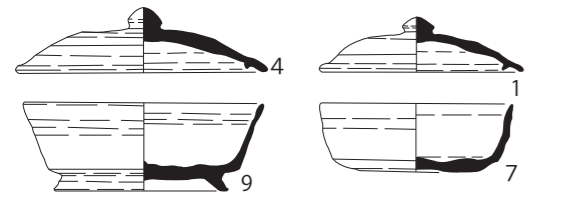
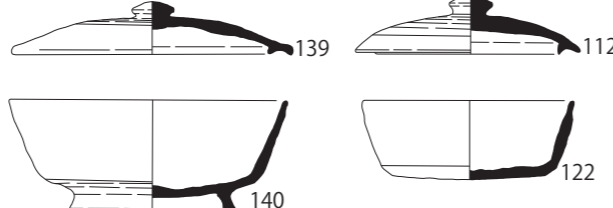
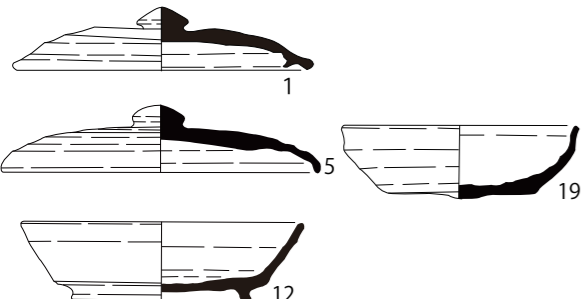
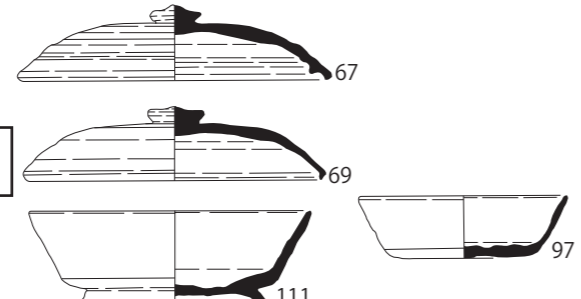
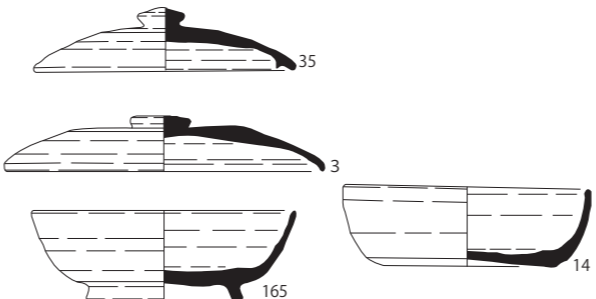
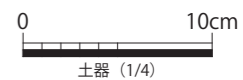
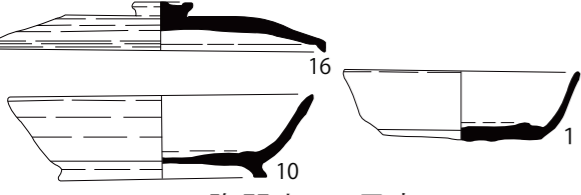
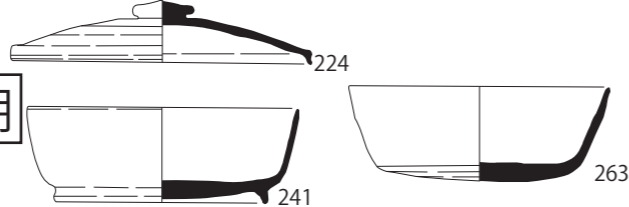

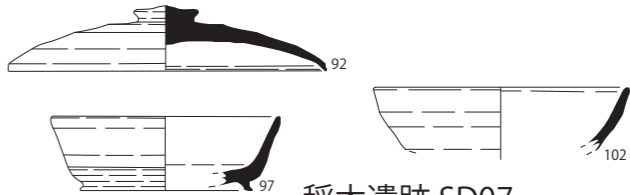
<p>1期</p>  <p>高蔵寺 43 号窯</p>	<p>588 年以前</p>  <p>飛鳥寺下層</p>		 <p>北原 2 号墳第 2 石室</p>
<p>2期</p>  <p>高蔵寺 209 号窯</p>	 <p>甘樫丘東麓遺跡谷埋立土</p>		 <p>下川津遺跡 SD III 86</p>
<p>3期</p>  <p>高蔵寺 217 号窯</p>	<p>641 年以前 『上宮聖徳法王帝説』裏書</p>  <p>山田寺下層 SD619</p>	 <p>青ノ山 1 号窯</p>	 <p>兀塚遺跡 SR602</p>
<p>4期</p>  <p>高蔵寺 217 号窯</p>	 <p>坂田寺 SG100</p>	 <p>志度末 3 号窯</p>	 <p>川津一ノ又遺跡 SD10 旧練兵場遺跡 7-8 区 SX02</p>
<p>5期</p>  <p>高蔵寺 46 号窯</p>	 <p>大宮大寺 SK121</p>		<p>* 遺物番号は 陶邑編年は田辺 1981 から 飛鳥編年は奈良文化財研究所・歴史土器研究会 2019 香川県内の遺跡はそれぞれの報告書の物をそのまま引用している。</p>
<p>6期</p>  <p>高蔵寺 48 号窯</p>	<p>681 年前後 木簡群</p>  <p>石神遺跡 SD640</p>	 <p>小谷 1 号窯</p>	
<p>7期</p>  <p>陶器山 21 号窯</p>	 <p>藤原宮 SD2300</p>	 <p>大坪窯</p>	 <p>稲木遺跡 SD07</p>

図 5：飛鳥時代における香川県内の須恵器変遷表

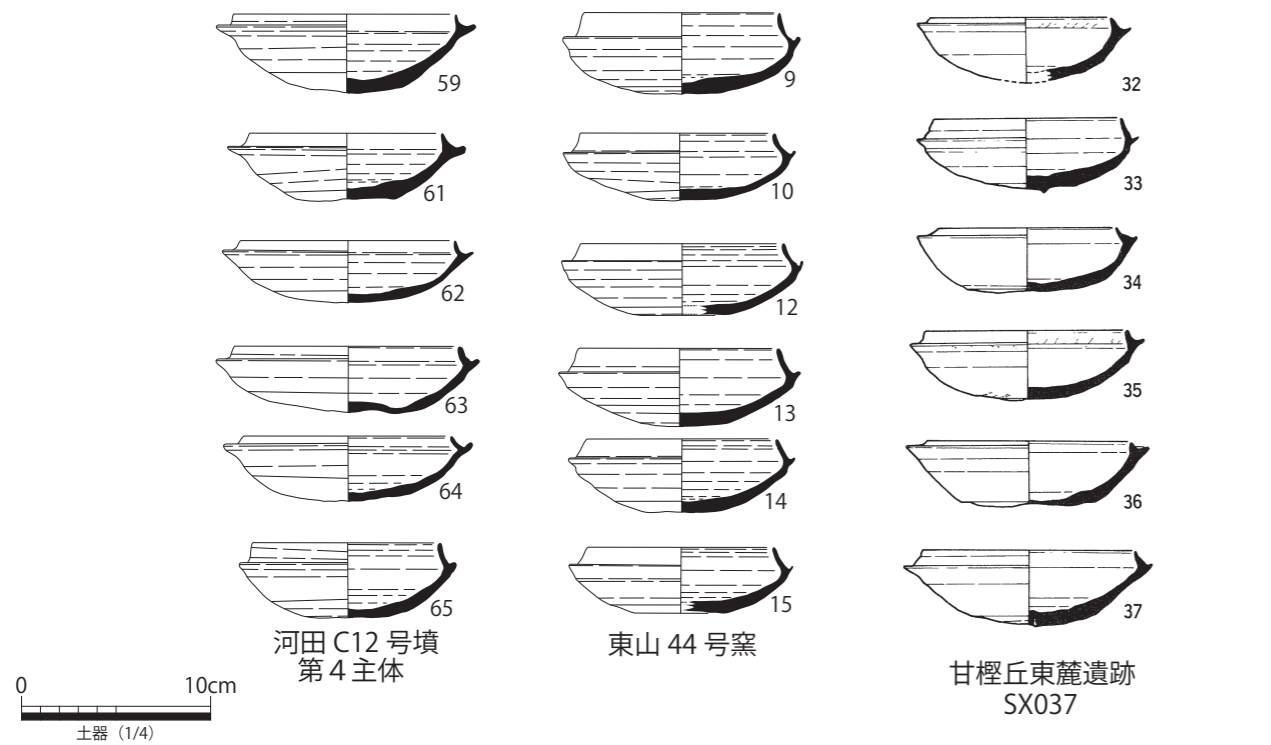


図6：東海地方の地域色と飛鳥地域の基準

(甘樞丘東麓遺跡 SX037：奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部 1995 より引用、河田 C12 号墳第4主体と東山 44 号窯は発表者実測)

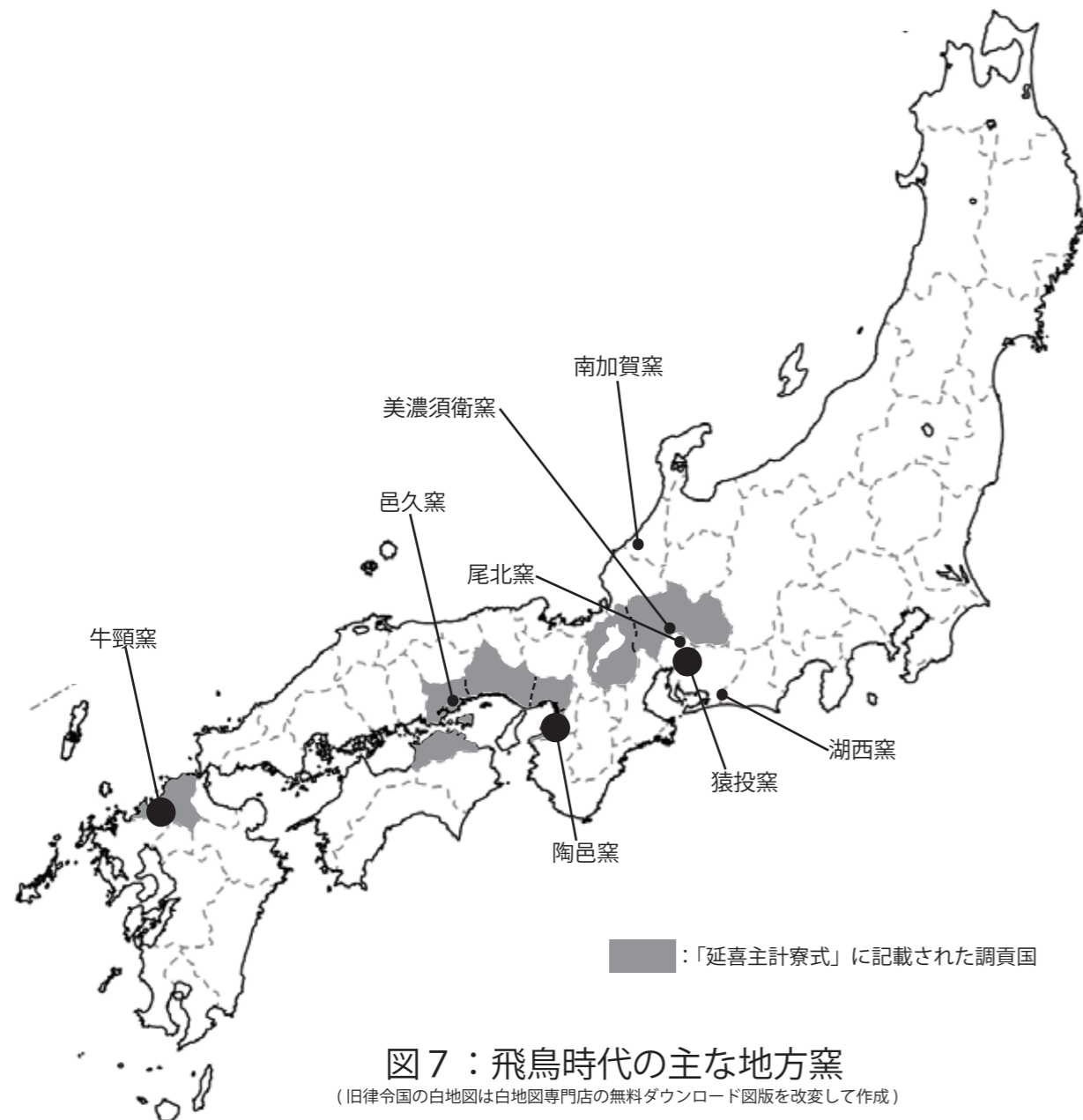


図7：飛鳥時代の主な地方窯

(旧律令国の白地図は白地図専門店の無料ダウンロード図版を改変して作成)

参考・引用文献

稲垣 僚 2020「飛鳥時代の南伊勢地域と須恵器の絶対年代-昼河 C-12 号墳と河田 C-12 号墳を対象に-」『三河考古』30 三河考古学談話会

尾野善裕 森川実 大澤正吾 2016「飛鳥地域出土の尾張産須恵器」『奈良文化財研究所紀要 2016』奈良文化財研究所

尾野善裕 森川実 大澤正吾 2016「飛鳥地域出土の湖西産須恵器」『奈良文化財研究所紀要 2017』奈良文化財研究所

尾野善裕 2018「藤原宮朝堂院第二次整地土出土土器の再検討」『奈良文化財研究所紀要 2018』奈良文化財研究所

香川県教育委員会 1989『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 6：稲木遺跡』

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1990『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 7：下川津遺跡』

香川県埋蔵文化財調査センター 1997『川津一ノ又遺跡』香川県教育委員会/香川県埋蔵文化財調査センター

香川県埋蔵文化財調査センター 1998『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 30：川津一ノ又遺跡 2』

香川県埋蔵文化財調査センター 2000『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 8：野午古墳・末 3 号窯跡』

香川県埋蔵文化財調査センター 2002『小谷窯跡・塚谷古墳』

香川県埋蔵文化財調査センター 2003『北原 2 号墳・北原遺跡』

香川県埋蔵文化財センター 2014『兀塚遺跡』

香川県埋蔵文化財センター 2015『独立行政法人国立善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 5：旧練兵場遺跡 5』

片桐孝浩・佐藤竜馬 1997「四国地方における 7 世紀の土器」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東 5 7 世紀の土器—』古代の土器研究会

片桐孝浩 2001「川津一ノ又遺跡 SD15・10 の遺物の出土土器」『古代土器研究 3 ミニ・シンポジウム四国と岡山の 7 世紀の土器 第 86 回研究会報告』古代の土器研究会

佐藤竜馬 1989「香川県における 7 世紀の須恵器」『棕の本古墳 大石北谷古墳発掘調査報告書』長尾町教育委員会

佐藤竜馬 1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設 40 周年記念考古学論集』関西大学考古学研究室

佐藤竜馬 1997「7 世紀讃岐における須恵器生産の展開」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要 V—特集 7 世紀の讃岐—』(財)香川県埋蔵文化財調査センター

田辺昭三 1966「陶邑古窯址群 I」平安学園考古クラブ

多気町教育委員会 1986『河田古墳群発掘調査報告 III』

田辺昭三 1966『陶邑古窯址群 I』平安学園考古学クラブ

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

中村 浩 1978「第 6 章 和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑 III』大阪府教育委員会

名古屋市教育委員会 1979『光真寺古窯跡発掘調査報告書』

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部 1995「甘樞丘東麓の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』25

奈良文化財研究所 2002『奈良文化財研究所学報 63：山田寺発掘調査報告』

奈良文化財研究所・歴史土器研究会 2019『飛鳥時代の土器編年再考』

西 弘海 1986『土器様式の成立とその背景』西弘海遺稿集刊行会

松本敬三 若橋孝 1984『香川県古代窯業遺跡分布調査報告 I (旧刈田郡・旧三野郡)』

松本敬三 若橋孝 1985『香川県古代窯業遺跡分布調査報告 II (旧多度郡・旧那珂郡以東)』

丸亀市教育委員会 1980『青ノ山南麓における埋蔵文化財調査概報』

三重県埋蔵文化財センター 1995「明気窯跡群」『一般国道 42 号松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告 I』pp.17~197

森川実 大澤正吾 2018「石神遺跡 B 期整地土・SD640 出土の土器群~石神遺跡第 3~5 次・第 10~12 次」『奈良文化財研究所紀要 2018』奈良文化財研究所

山田邦和 1998『須恵器生産の研究』学生社

渡部明夫 1980「讃岐国の須恵器生産について」『鏡山猛先生古稀記念 古文化論叢』鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会

渡部明夫・森格也・古野徳久 1997「打越窯跡出土須恵器について」『財団法人香川県埋蔵文化財センター研究紀要 V』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター